

## 三谷邦明著『源氏物語彙系』

神田龍身

三谷邦明の『源氏物語』入門書「彙系」が上梓された。なにも入門書に向きになることもないという気もするが、作品を現象させ流通させる最良のメディアこそが入門書であるという意味からすれば、なまじの研究書以上に、入門書をものすることの方がはるかにスリリングであったはずなのである。三谷の源氏学は、いまや入門書という装いのもとに世の隅々にまで暴力的に浸透せんとしているのだ。三谷は勤務校である横浜市立大の学生のために筆をとったと遠慮がちに述べているが、そこにある野心をみおとすべきではないし、我々もこの書を心して受けとめるべきなのである。

が、それにしても本書を読んで、私は三谷の学問のなんたるかについて改めて考えさせられてしまった。先般出版された大著二冊『物語文学の方法』にみられた様々な論の可能性があらかた削ぎおとされ、いかにも三谷らしい部分がそこに凝固し投げだされてあるからなのだ。頑固にも物語文学という書かれたテクストの分析にのみ固執する三谷。それはすぐれて現行の平安物語研究の学界状況の枠内にあることは明らかなのだが、そのような禁欲的にして高踏的な態度についての批判はここでは控える。三谷は、「多義的な意味不決定」「無限といつてよい読みを増殖」「できこ

とをひびきあわせることが、源氏物語を読む行為」……ということのように『源氏』を読むことの意味について再三述べているが、本書から受ける印象は、それとはおそろしくかけはなれたものである。まさにその点をこそここでは問いたいと思う。

「ストーリー」と「プロット」を弁別したE・M・フォースターの論、それがフォースターの意図を越えて三谷物語学の基本に据えられている。初期物語が「そして」の論理で直線的に進行していたのに対し、出来事の意味（主題）を追求した『源氏』において「なぜ」の論理が成立したと三谷は言う。またそのために直線の時間は解体し、「虚構の時間」と「叙述の時間」とのズレ、時間の継起性を遮断する「描写」、さらには先行するものの意味を後のものが規定する「時間の循環」等の諸現象が生じたとする。

初期物語から『源氏』へ到る文体的達成が「なぜ」一本で整理されており、まさに快感の一語に尽きるのであるが、滝沢馬琴の「稗史七法則」にふれた時にも似て、なにかひどく単純なものがここにはありはしないであろうか。AとしてBではなく、BになつたのはAだからである、というのでは単なる因果律の問題を表現のバリエーションの次元で確認しているにとどまっていると思われるからなのである。なるほどシニフィアンはそれ自体としてはシニフィエをもたずに宙づりにされているのであり、後続の他のシニフィアンと関係づけられ差異が呈示されることによって、事後的に意味が現象する。シニフィアンとシニフィエとは予定調和的に結合しているのではなく、双方は時間的に逆行する関係にあるというわけだ。が、それがここでは単なる因果の問題に回収

されてしまっており、後続のシニフィアンが意味を決定する優位項（因）として、先行を「果」として根拠づけているだけのことであり、これではいかなる分析も安定した自己完結的な世界構造の確認以外のものではないことになる。因と果は向かい合い、ここには余剰なものがまったくないのである。

三谷自身は因果にそれほどこだわっていないと言いかもしれないが、私が言いたいのは、すべてを根拠づけ意味を決定する中心としての超越的シニフィアンの存在を三谷が毫も疑っていないという点に文句を言っているのである。それはある時は、物語世界すべてを主催する光源氏の王権性であるかもしれないし、あるいは藤壺事件であるかもしれない。例えば、「反復」や「引用」という観点から場面と場面とが関係づけられ、臘月夜や女三の宮の密通事件と藤壺事件との「差異」が測定され、パロディ性が論じられてはいるが、その差異なるものも実体的な違いではないのであり、藤壺事件を中心に据えてのそれとの階層的距離以外のものではないのである。「ゆかり」「形代」の喩論にしても、喩の独自性が強調されてはいても、始源あつての喩という前提までつきくずされることはない。

三谷は「襲糸」という書名からも解るように、織物の喩を好み、テクストの变幻自在性を言うが、ここにあるのはピラミッド型の鉄筋の構造物とも言うべきものなのであり、脱中心化の相対的關係のネットワークのなかを彼が彷徨しているわけでは断じてないのである。三谷の構造に対する認識はいささか甘いとすべきなのであるか。岡部隆志は三谷の前掲大著についての書評（「物

語」創刊号、砂子屋書房）のなかで、用語はポストモダンだが体質はモダンだと三谷の方法について喝破しているが（さしづめ藤井貞和はブレモダンというところか）、まさに至言とすべきであろう。もちろん『源氏』そのものが三谷の言うようなハードな物語であると言ってしまうはそれまでだが、そもそも三谷の駆使する用語群は、『源氏』正篇ではなく、続篇「宇治十帖」の世界に対してこそ効力を發揮するものと思われる。薫なるものは匂宮ではないとする否定形においてしか定立できず、いかなる実体も存在せず、いかなる因果によっても説明され得ないアナキーは世界でそれはある。にもかかわらず、三谷の分析はほとんど正篇のみにとどまり、続篇に対しては著しくバランスを欠き、ありきたりの説明しかほどこしていないのであり、三谷の方法のなんたるかはこれからも明らかというものである。が、それにしてもツリー状の王権の秩序世界そのものを悪趣味にも幻想する『源氏』正篇の世界とはいったい何なのであるか。多くの研究者がその分析に没頭し、三谷もそのことの意味をまったく疑っていないのであるが、正篇を論ずることの意味は決して自明なことではないのではなからうか。三谷にはまずはそのあたりの問題から筆を起してもらいたかったような気もする。

三谷に対して大分失礼なことを書いてしまったが、私達の世代は三谷から実に多くのことを学んできた。が、盲目的な三谷信者になれないような状況に今我々が立ち到っていることも確かなのであり、その異和感をこそ我々が対象化すべきではなからうか。

（一九九一・一〇 有精堂 A5判 二一〇頁 二〇〇〇円）